ラストシーン　　第2章

村津　ヨシタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラストシーン　第２章

【Ｎコード】
Ｎ７５２５Ｓ

【作者名】
村津　ヨシタ

【あらすじ】
ミエは亡くなった叔母の部屋を片付けるためにマンションを訪れた。

第2章（前書き）

今回は、叔母の人と也をミエに回想させながら書きました。
登場人物はあえて未だにミエ1人で会話がなく、風景描写等を少しずつ重ねて
いこうと思って書きました。

第2章

大姉様は母より9つも歳が下で、顔も何となくしか似ていない。大学生の頃に文芸雑誌の賞で入選して小説家になった。私の母よりも背が高い。
長い髪をたらすと少し陰がある柔和な表情で清楚であるように見えたけど、一緒におしゃべりをしながらワハハと男の人のように笑うような快活な一面も持っていた。
都内のマンションで一人暮らしをしていて、学生の私から見てカッコいい都会的な女性だった。
早い話、大姉様に憧れていたのだ。
小説家として活躍を始めるとさすがに家に遊びには来なくなったけど、逆に都内の大姉様の部屋に遊びに行き、
その度に執筆作業の邪魔をしたように思う。ときには仕事で来ていた出版社の人と鉢合わせになり嫌な顔で見られた事もあった。
そういうときは大姉様の仕事の締め切りが近づいているときなのだ。でも大姉様はそんなときも追い返したりしなかった。もちろん仕事の邪魔はできないが部屋から帰されたりはしなかった。
そのときは、小説というものが生まれ出る場面に遭遇しているようで嬉しかった。
大姉様は、そういうときの締め切りに遅れた事は無かった。
自分にも誰にでもキリっとした態度を取れる人で甘えの無い生活をしていた。
自分はおっとりとした母の性格を受け継いだからか、こんな大姉様の生き方を真似したいとさえ思った。

大学が豊島区にあったので、学校の帰りによく大姉様のマンションに寄った。
文学部での成績は中の上といったところだろう。何にでも最初は真

剣に取り組むが長続きしないと人からは言われる。
大姉様からも、ミエはやれば幾らでも出来るタイプなのにね、といつも言われた。
大姉様に憧れたところから文学部に入ってみたものの自分が文学を追究するというよりは、
ただの読書好きのレベルでしか文学に取り組めていなかった。

私は小説というものを一度も自分で書いた事はなかったけど、文学部の生徒には自分でも小説を書く者は珍しくなかった。
ひょっとしたら、いつかは書けるように成長するかもしれないと思った事があったが、
そういう話をすると友人には呑気者扱いをされた。同じゼミの友達にも叔母が小説家だという事を話していない。
叔母は本名の砂田真希ではなく清原澄子というペンネームを使用していて事もあって清原澄子の正体は内緒にするという事が
自分の中で決まり事になっていた。
私は清原澄子を知っている。
得意に思ってきたけれど、世間では清原澄子の死を知っているのはまだ限られた人だけだった。
マスコミは小説家の清原澄子としてではなく、交通事故で1人の女性が亡くなったという取り上げ方しかしていなかったのだ。

柔らかい感じの少し焦げ茶色の木で出来たその机の上には、資料に使っていたと思われる幾つかの資料本が置かれていた。
ミエが小学生から使っている机のように本棚は付いていない。本は整頓した積み方より斜めに少しずれたように重なっている。
資料は正面から見て左に、ペン等の筆記用具は右に。腕の長さに合った分の距離に自然と扇状に置かれているようだ。
使っている間にいつのまにかそう置かれるようになったに違いない。
それでいて、ノート型パソコンも置いてあって、そういえば大姉様

はペンで書いたり、パソコンで書いたりしていた。
どのように分けていたのか聞いた事は無かった。でもまだ大姉様の書く様を私は思い出せる。
それは、誰かに話したくなるような美しい様だった。　すっきり伸びた背筋、小さくて丸い肩と弧を描いて掛かる黒髪。
伸ばした腕は規則的に細長いペンを踊らせる。飛び上がると原稿用紙をめくる髪のくしゃっとした音が聞こえる。
大姉様はリズミカルに歌い上げるように原稿用紙を埋めていった。
ペンのその機嫌が本当に良いとき等は、ぴょんぴょん跳ねるように走る事も有るのだとういう。
大姉様の姿もそのときはきっと椅子から浮かび上がらんばかりになるのだろうとミエは考えた。
全部全部まだ目の前に浮かぶ。
机に合わせたアンティーク調の木のずっしり重い椅子ずらしてミエは机の下を覗き込んだ。
まだ、何も書かれていない白い原稿用紙の束が端に寄せられて有り。
となりに白い革のバック。
見た事のあるバックだ。
他にもいくつかバックが有ったが、これだけは中身が入っていそうで開けて中を見てしまう事がつい躊躇われた。
そのバックを部屋の隅のダンボール箱とは違う所に置き、机の上の本や筆記用具の類は箱に詰めた。パソコンも処分はできないなぁ。
本当は捨てる物は何も無い。捨てたくもない。ミエは箱につめてもどこかに保管する事はできないか母に相談しようと思った。
携帯を開けると午後2時を回っていた。
壁にかかる絵を真ん中に片付いていない部屋の方向を向けて写真を撮った。
その絵は、大姉様がうっかり露店で買ったのだと笑っていたものだ。
絵画には興味が無かった大姉様だったが上野の露店商のトークに負けて買ったと言っていた。

そういっても３０００円だったんだけどね。
そんな絵をなぜか部屋の中心とでも言うべき場所に飾っていた。
でも、たまに曲がっていたりして大事に飾る気があるのか無いのか良くわからなかった。
その頃は大姉様の忙しさの合間だったのか部屋で二人でケーキを食べた事があった。
駅前にある洋菓子店のだったっけ。でも本当は大姉様はあまり甘い物好きではなかったように思う。
きっと私に合わせていたのだろうと、ミエは思った。
夜になると柔らか照明の点く落ち着く部屋だった。ミエは作家の部屋には丸めた原稿用紙が転がっていたり完成した原稿が洗濯バサミで挟んで吊るされているんじゃないかと言った。大姉様はブハッと吹き出して顔を真っ赤にして恥ずかしそうに笑った。
やっぱり私はがさつな感じに見える？私は作家の一般的なイメージを言ったのだが大姉様は違う受け取り方をしたようだった。
照れて顔を赤らめて可愛いところにまた憧れた。主婦になったミエの母とは違い独身の女性だからだろうか。
それとも小説家という職業のためか大姉様は母と姉妹であるというよりは、むしろミエと姉妹というように見えた。

１０畳程度のリビングを含む高層マンション１ＬＤＫ。東京の暮らしとしてはけっして貧しくない暮らしぶりだった。
あまり料理はしていないようで玄関近くのキッチンスペースはそういう意味でいつも綺麗だった。
広くはないが学生アパートのようなむさ苦しさは無く、コンロも二口のシステムキッチンだ。
タイルも床のフローリングも艶があって、ミエの家の台所の様に油汚れやごちゃごちゃと食器が積まれているような事は無かった。
わずかばかりの食器は有るには有ったが、それはもう前回来たときに箱にしまってしまった。

開け放しの食器棚の扉の脇を風が抜けた。

（第２章、まだ途中）

第2章（後書き）

読んでくれて、ありがーと。
第2章はもっと先までストーリーが進むはずなんだけど
文章を作る練習をするために沢山文字を書いてしまい
話が進まないままとりあえずアップする事にしました。
次章はいよいよ他の登場人物が出る予定です。

第2章続き（前書き）

大姉様の部屋を片付けるミエの手に沢山の思い出が触れる。
弾けるように、記憶が蘇る。ミエはそれでも荷物をまとめ、仕分け、
そして捨てるのだ。これは亡がらを火葬にするのと同じ事であろう。
（前書きじゃないな、、）

第2章続き

午後になって風が変わった。
夏の季節風は東京の街を生暖かくする。大姉様の部屋の開け放しの窓から生温い空気が流れ込んで来た。
ミエが作った幾つもの箱詰めの荷物の間にねっとりと溜まってきた。足下だけ水に浸かっているように感じる。ミエは気付いた。好きだったあの窓から見る東京の空から吹く風が嫌にまとわりつくのは自分の思うせいなのだと。
机の一番下の引き出しからの最後の荷物を箱に詰め終わった。この作業のせいだと思う。
大好きな大姉様の、その中でもこの机を片付けているのだから良い気がする訳が無い。
この机の上で小説が生まれていったのだから。そしてもう生まれる事は無いのだけれど。
　箱に入れかけたペンをミエは自分のバックに入れた。文芸作家に似合いそうな艶のある淑やかな色のペンだった。このペンの先から物語が魔法のように産まれ、丁寧に紡がれる文章をミエは何度も見せてもらった。大姉様はこのペンを大切に使っていたけど、このペンを私自身が使う事はないだろう。
もちろんこのペンで小説を書いてみたらどうだろうとかなんて、まさか試す気もしない。
でもこの部屋の荷物達の中で最も大姉様と繋がれるような、通信ができそうな物はやっぱりこのペンだと思う。あるいはこのペンこそが物語達と、大姉様を繋いでいた通信機だったのかもしれない。
　傾きを変えた日差しがさっきよりも部屋の奥に入り込んで来た。
夏らしい陰を作り、その陰は物の形をくっきりと映す。
ミエが作った幾つもの箱が景色を変えた。部屋の中の印象が変わってしまったと思った。

生家を離れた事の無いミエには、引っ越しをする時の部屋のような箱積みの部屋の様子は見慣れなかった。陰影が強くなったが彩りは冷めた様にミエには感じられた。
思い出が消えてしまうようで寂しいけど大姉様の荷物を片付けるのは自分でやりたかった。
もう一息で終わる。その時玄関のチャイムが鳴った。
主の居なくなった部屋にお客が来るのは変に思える。
1人でこの部屋を片付けていた時に誰かの訪問はこれまで一度も無い。
ミエはドアの覗き窓から音を立てないように外を覗いた。
そこには、スーツ姿の男が一人立っていた。顔は見た事が無い。
『どなたですか？』ミエはドア越しに尋ねた。怪しいとも思う。
『N出版の寺島と言います』　あまり抑揚の無い言い方だ。　N出版は大姉様の本を出版していたと覚えている。寺島の名前は聞き覚えが無い。本当に出版社なのだろうか等と巡らしていると
『あの、開けて下さい』少し不機嫌な口調で寺島が言った。
ミエは鍵を開けてドアをゆっくりと開ける。とたんに目の前に寺島の少し日焼けした顔が大きく迫って来た。すんでの所で思わずのけぞると寺島はミエの脇を抜けて、ころっと靴も転がすように脱いだ。
『ちょっとお邪魔します』　と後から言った寺島はリビングに行き、ミエはそれを玄関から見ている。驚くべき失礼さだ。『ご用件は何ですか？』リビングに入った来訪者に玄関から用向きを尋ねるなんて尋常ではない。
すぐ終わるとかなんとか言って、寺島はこちらも見ずにあの大姉様の机の引き出しを開けたりしている。
『勝手に触らないでもらえますか。迷惑です』この机にだけは触られたくはない。ミエにしてはきっと強い口調で言えた方だった。
するとようやく、寺島は手を止めてこちらに向いた。息をつくと上着を脱いだ。
さっき、覗き窓から見た印象より背が高かった。見かけも若い事に

気がついた。
『私は親戚の者ですが、用件があるなら先に言って下さい』
寺島は脱いだ上着を並べた箱詰めの荷物の上に置いた。
『探し物をしに来たんですよ』　さっきより丁寧語が含まれた分だけましになったが抑揚の無い物言いはミエの癇に触る。
『ラストシーンを探しに来たんだ』ミエはその意味が分からなかった。
『それって本の出版に関係するものなんですか？』
ミエの問いがまさに正解を言い当てていた。　寺島が探しに来たのは大姉様が最後に書き続けていた連載小説の最終話、ラストシーンの原稿だった。
『清原先生が亡くなる前の日、原稿が仕上がったって連絡があったんだ』
寺島はミエに机の中の荷物を納めた箱がどれか尋ねた。理由を言ったのだから探す権利が有るとでも思っているかのようだった。ミエの答えた箱を寺島は開いて中を探し始める。理由が仕事に関したもののようなので学生のミエには良く理解できない仕方ない事情なのだと思う事にした。
でも初対面の人に荷物を探られるのは不快感があった。
寺島は荷物の中でも袋や小箱に納められた物を１つ１つ開いていた。面長の顔の上にぼさぼさの髪の毛が乗っている。不潔な人かもしれないと思ったがスーツはよれてなく、指の爪も切っていた。
探している物がどれかミエに聞いて、どこにありそうか教わろうとすれば良いのに。とミエは思う。
ミエは寺島を眺めていた。それに気付いたのか寺島が顔を上げてミエの顔を見た。
何か思ったように小さく頷いたように見えた。
そして言った。
『清原先生に顔が似てるね。さっき見た時びっくりしたよ』
いきなり言われてもミエも対する言いように困った。

また寺島は、ぼさぼさ頭をミエに向けて箱の中身を探り出した。

続く。

第2章続き（後書き）

昨日は最後まで書いてから全部データが消えてしまったのですが今日はアップ成功です。
昨日書いたものを思い出しながら書いていたのですが少しずつ内容が変わったようにも思います。
やはり、小説はその瞬間に産まれる唯一無二のものです。
また、記憶は曖昧で変わりやすく全く頼りがいの無いものです。

次回も宜しくお願いします。

第2章続きの続き（前書き）

叔母の突然の死から、日も浅くミエは悲しみの中で遺品の整理をする。
思い出の中に浸りながら穏やかな時が流れ行くとき、寺島という男が、
お姉様の遺稿を探すためにやってきた。

第2章続きの続き

「ラストシーンを皆が待ってるんだ」
寺島はミエにそう言うと、探り終わった箱を横に置き、次の箱の梱包を解いた。
こんな乱暴な人は他にはいない。「やめて下さい」ミエは、また寺島の腕を払いのけた。
ぼさぼさ頭の下の面長顔が上がってミエを見た。
ミエの手は段ボール箱が開かない様に押さえていた。
ミエにとってこの部屋は大姉様との思い出の部屋であったから、ましてや大切な思い出をしまった箱を開けられてしまう事は許せなかった。
困ったとでも言うように寺島は頭をかいた。
きっと、この男は生前の契約なんかの理由をもっともらしく持ち出して自分に偉そうに権利を主張するんだろうと思う。ミエはそんな理屈に従うつもりは無かった。
そうして、寺島は荒っぽく自分の前に立ちはだかる見ず知らずの女子大生を相手にしばし考えてこう言った。
「分かったから、勝手な事はしないけど、、悪いが探すのを手伝ってくれないか？」
そして寺島は、ミエの手が蓋をした段ボールを指差した。

第2章続きの続きの続き（前書き）

N出版の寺島は、少々デリカシーに欠けるところがあるようでミエは早々に彼を嫌いになったようだった。
しかし、寺島はそんなミエにいっしょに大姉様の遺稿ラストシーンの部分を探すように依頼した

第2章続きの続きの続き

『いいかい？　清原先生には沢山のファンの方がいたんだ。その方達に作品を届けてあげたいじゃないかい？』
寺島は、まっすぐな目でミエに言った。
部屋の中には既にミエがこのところ連日この部屋で整理した荷物が幾つもの段ボール箱に詰められて積まれていた。
ミエにとっては大切な大姉様のとの思い出の数々であり、それを手に取りしまい込む事は何ら苦にならなかった。箱の数は３０箱を下らないだろう。
作家だった大姉様は、資料にするための本を沢山持っていたし、それ以外にも女性が誰でも普通に持っているような服やバックもある。それは全てが今のミエには宝物だった。けれども寺島はその中の原稿だけが要るという事なのだ。
それならば、仕方ない事だろう。大姉様の小説が沢山の人達に読まれる事は、それは大姉様も望んでいるはずだった。さっきまでの寺島のもの言い方は気に入らなかったが、さすがに簡単に見つからないせいか、寺島もミエへの態度を変えているように見えた。
それ程、大切な原稿なのだろう。そもそも大切ではない原稿など無いのかもしれなかった。
でもその在処は、ミエにも思い当たる場所が無いように思う。
原稿用紙はもう大体は整理が付いているはず。他に遺稿とも呼べるものは無かったのではないだろうか。
『パソコンの中にデータで入ってないかな？」寺島が言った。
そう言えば、大姉様はパソコンで作った文書を原稿用紙のスタイルで印刷して出版社に渡していた事もあった。
今度の、作品もそうしてパソコンの中に眠ったままかもしれない。
ミエは、パソコンをしまった箱の封を解いた。　寺島はミエを押しのけるように箱の中を探って白いパソコンを取り出した。いつも大

姉様の机に置かれていたものだ。
真剣に探すのはわかるが、寺島に、また先程のような乱暴さがでたのでミエには不快に思えた。
寺島はパソコンを手にするともう、ミエには一瞥もくれずに大姉様の机にどっしりと座りパソコンの中に入ったデータを1つずつ探し始めた。
生暖かい空気がさっきより不快度を増した。寺島のこめかみに汗が浮かんだ。
窓からの心地よい風は止まった。ミエは涼を取ろうと窓際に立った。
机の前の寺島が仮に大姉様だとして、自分は何度もこんな風に窓際より大姉様の姿を見た事だろうか。
背筋を凛と伸ばして言葉と向き合うその姿は勇ましくも思えた。大姉様には言葉の向こうに何か自分には見えない風景が見えていたのだと思う。
ミエはそう確信している。それが何なのか尋ねてみた事は無いのだけど、ミエ自身に見えなくては意味が無いのだと思っていた。
寺島には理解できているのだろうか？
この人はそれが分かっていて、であれば探し出せるようにも思える。それなら小説の方から人を選んで表に出てくる。大姉様がそう仕掛けている。
ミエはちょっと飛躍しすぎたかもしれなかった。でも東京の大姉様の部屋で結局二人はお互い殆ど言葉も交わさずたった1つの原稿を探してた。
やがて、寺島があったと言った。『見つかった』
寺島はミエを手招きした。ちょっと嫌な感じの手招きだったがミエは窓際を離れた。
机の前の寺島の背後に回ると生暖かい空気はこの机の周囲のどこかから漏れだしているようにも感じた。ミエはパソコンの画面を覗き込んだ。
『ファイル名では探せなかったけど、見つかったよ』

寺島はお目当てのファイルを開いた。　ファイル名はαと書かれ識別用の日付が記号として付け足されている。
α０７３１。これが寺島が探していた小説のラストシーン。
間違いなく大姉様の遺稿となる小説の原稿であり、これで小説の物語も完結する。
多くの読者の人気を集めていたという連載小説だ。
大姉様はもういないが、作品はこうして残るのだ。
そんな事ができる大姉様はすごい。小説家は皆がそうなのだろうけどミエは大姉様しか知らない。
開いたファイルが画面に写し出される。
『遠くにベルの聞こえる。』
大姉様は、生きているのではないか。いやそれと同じ事なのだ。
しかし、生暖かい空気はまだミエの回りを包んでいた。

第2章続きの続きの続き（後書き）

雨が続きます。
まだまだ、筆が進まなくて。自分の言葉。筆遣い。
リズムとか何かいろいろ出てくるのに時間が掛かりそうです。
次回からは多分、このマンションを出て次の展開になります。予定です（笑）

第2章続きの続きの続きの続き（前書き）

寺島はついにラストシーンが書かれた原稿を見つけ出した。

第2章続きの続きの続きの続き

『遠くにベルの聞こえる。』
これが、大姉様が生涯の最後に書いていた小説のタイトルだ。
この部屋で書かれていたが、ミエはこのタイトルの原稿を読んだ事は無かった。
すでに単行本として出来上がったものは大抵は大姉様からもらって読んでいた。
しかし、この連載中の小説は一部分も読んだ事は無かったしタイトルすら知らなかった。
単行本として出来上がっていたなら、その初版の中からミエに与えられたのだろう。
寺島はこのラストシーンが書かれた原稿をメモリーカードにコピーして持ち替えると言った。
そういうのって一応は身内に断りを入れて持ち帰るものじゃないだろうか？とミエは思った。
本人がいなくなった今、遺品だったり形見の類いになったりはしないのだろうか。
おそらく、大姉様と出版社の間には契約というものがあり、それによって原稿を持ち帰る権利が寺島にはあるのだろうけど。それはわかるのだが、ミエの胸の奥にはなんだかじくじくした思いがわいてくる。
自分にとっての大姉様のラストシーンがむしろ形見であるなら、この無愛想な寺島にとってのそれとの違いがじくじくした感じの原因になっていると思う。
そして自分は目の前の寺島に何かを言う事ができるだろうか？
それは、例えば原稿を渡さないという事だろうか。ミエは自分が知らなかったこの小説に所有権を持っているなどと口に出来なかった。
寺島はそのうちに、ラストシーンの入ったメモリーを胸の内ポケッ

トに入れた。
上着を着なおすとミエに向き直った。
『この原稿はちゃんと本にして書店にならべるからね』
最後だけ寺島はなんだか愛想が良いように見えた。

行ってしまった後で、ミエは寺島が自分になんのお悔やみの挨拶もしていない事に気付いた。
それ自体はもうどうでも良かったが、寺島本人はそれを忘れていたのだろうか？
それとも自分が若く未熟に見えたので挨拶は省略されてしまったのだろうかなどと考えた。
寺島のあの態度の訳が自分を低く見えていたという事なら、それでも説明がついてしまうからだ。
さっき、お悔やみの挨拶もないのか、などと指摘していれば寺島の態度も変わったかもしれない。
ミエは、自分が正しい指摘が出来なかった事こそが理由だとなんとなく分かった気になった。
また1人になった部屋でミエは、自分が大姉様の全てを知っているわけではないと思った。
その思いがじくじくした心の有様の真相なのかもしれなかった。

気がつくと生暖かい空気は消え去って、開け放しの窓からは心地よい風さえ吹き込んで来た。
街道沿いの渋滞のぎすぎすした音は遠くに聞こえている。
午後も、もう充分に廻って暑さの頂点は過ぎたのだろう。
目の前の開けてしまった箱らを、また閉じたら今日はそれまでだろうか。

遠くにベルの聞こえる。
耳を澄まして、このタイトルを心の中で読む。

このベルはなんの種類のものだろう。

第2章続きの続きの続きの続き（後書き）

今日見ると更新したはずの小説が無くなっていて驚きました。
また、データが消えたかと思いました。
バックアップがあったのでとりあえず再度更新をしました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7525s/

ラストシーン　　第2章

2011年11月16日09時49分発行